

校長室だより		令和3年5月15日発行
<b>共学共高</b>	第 1 号	発行責任者 白梅学園高等学校長 武内 彰

## 共に学び、共に高め合う

私が令和3年4月1日に着任してから1か月余りが経った。この間に感じたことや今年度特に力を入れていきたいことなどについて述べる。

白高生たちの授業に臨む様子、部活動への取組、進路ガイダンスや学年集会の様子などをみて第一に感じることは、生徒たちの可能性である。日々の授業に真摯に参加しているし、身だしなみや行動もきちんとしている。過日実施された避難訓練においても、誰一人として私語をすることなく整然とグラウンドに避難し、点呼終了までの時間も短時間であった。また、運動系文化系を問わずに、部活動にも多くの生徒たちが参加し、活気のある放課後となっている。もっとも、現時点では東京都に緊急事態宣言が発出されているために、高体連等の大会参加を控えた生徒のみの活動となっているが。

学校は、授業等を通しての学力形成と学校行事や部活動等を通しての人間形成を成し遂げていく場である。彼女たちがそのいずれにおいても大きく飛躍していく可能性を秘めていると感じている。

先生たちの生徒たちに寄り添う姿も本校の強みである。着任前の新入生招集日の様子を見ていたが、すべての先生たちが外に出て、来校してくる新入生とその保護者に声掛けをしていた。こういう姿勢は自ずと生徒や保護者に伝わるものである。今でも1学年の先生たちは毎朝校舎の入り口で生徒たちを迎えている。新入生たちが学校に慣れるまでの見守りなのであろう。私たち大人がどのように生徒たちと関わっていくか、これは極めて重要なことだと考える。一人の大人との出会いが、その生徒の人生を左右することもあるからだ。生徒に寄り添って、向き合って、やがて自分の力で走り抜けさせていく、そういうイメージを持って生徒たちと接していきたいものである。

私が年度当初に先生たちにお願したことがある。それは、「生徒間の対話のある授業場面を創る」ことである。先生から生徒へ問いを投げかけ、自分の頭で考えさせる、考えたことを隣の生徒と出し合ってみる、その対話の中で新たな気づきを得たり、自らの考えを深めたりすることが可能となる。生徒間の対話とは、何も4人グループで10分間話し合わせなければならない、ということではない。「このことについて、隣同士で1分間話し合ってください。」「考えたことを30秒間出し合ってください。」という投げかけでよいのである。知

識の一方的な伝達だけでは見えない生徒の思考が認知されてくる。それを表現させることによって、集団で学ぶ意義や意味が出てくる。その結果として、先生が到達させたい既存の知識へと導くことができれば、質の高い授業だと言える。そうした授業を広げていきたいのだ。生徒たちには臆することなく、自分の考えを率直に出し合える開かれた集団であってほしいと願っている。校長室へ来る生徒たちと話していると、そういう授業場面の大切さを理解してくれているな、と感じる。

今後の白高生と先生たちの取組に期待をしつつ、私自身もできること、なすべきことに取り組んでいく。

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）

